

中国塩神廟調査報告 (2)

――西の塩都自貢と東の塩都塩城――

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東北学院大学アジア流域文化研究所 公開日: 2026-05-13 キーワード: 作成者: 谷口, 満 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000963

中国塩神廟調査報告（二） —西の塩都自貢と東の塩都塩城—

谷口 満（東北学院大学・名誉教授）

2023年10月、四年ぶりの中国訪問を出迎えてくださったのは、楊華先生と丁建華夫人である。重慶空港にお二人が出迎えにこられたのは、これで何度目であろうか。今回の四川訪問に際しても十分な事前手配をしていただいたし、明日からもまた三日間帯同してくださるとのことであり、もはや何とお礼を申し上げてよいのかわからない。

翌日午前、重慶師範大学歴史与社会学院蔣剛先生のお手配で、大学院生の皆さんを前に一場の講演を試みるようになった。演題は「中国塩神廟調査報告」であり、これまで実施した塩神廟現地調査の概要と中国塩神信仰の特色及び日本の塩神信仰と中国の塩神信仰の比較検討を、かいつまんでお話させていただいた。かいつまんでいっても、講演時間は二時間近くに及んでしまい、七十三歳の老体には少しこたえることになってしまったが、お聞きくださった百数十名のみなさんの熱心さに支えられて、なんとか締めくくることができたのは幸いであった。この講演の内容は、いずれ文章化して公表したいと思っている。

講演の後、李禹階先生が来られて昼食をご一緒させていただくことになった。先生も確か七十歳を過ぎておられるはずであるが、体力・知力・気力ともにますます旺盛で、重慶師範大学の発展にこれからも尽力すると力強くおっしゃる。先生たちのご努力で、重慶師範大学の研究と教育の成果が一層大きくなっていくことを祈るばかりである。

丁建華夫人の運転で高速道路を軽快に走り、自貢に入ったのは午後四時であった。重慶師範大学の卒業生で自貢市塩業歴史博物館に勤務されている楊蕾さんが待っておられ、さっそく塩業歴史博物館を参観することになったが、大門の前にあった四川省塩源県の牧羊女塩神＝開山姥姥の塑像がない。以前訪問した際には確かに立っていたはずであり、どうしたのであろうかと周囲を見まわすと、雑然と配置されていた施設が跡形もなく片付けられて綺麗に整地されている。この整地作業の間に開山姥姥像が撤去されたにちがいない。

なぜこのような整備が実施されたのか、大門を入れば容易に了解される。塩業歴史博物館は大改修工事の真っ最中なのである。館舎部分だけでなく、大門前広場も面目一新されるらしく、それに先立って門前エリアの整地が実施され、開山姥姥像も撤去されることになったのであろう。大門に入って右側は工事のため展示がすべて撤収されているが、左側はまだ少し展示が残っているということで参観を勧められた。鑿井構造や汲水構造の模型などを見ていくうちに、ふと一つのパネルが目に入った。「自貢地方議事会嚮応辛亥革命順勢成立档案」の写真であり、档案の日付は1911年12月30日となっている。1911年の年末に自貢の人士によって「自貢（臨時）地方議事会」が設立されたことは、自貢の歴史を記した多くの文章に取り上げられているが、この档案はその原典史料ということになる。そこには次のような一文がある。

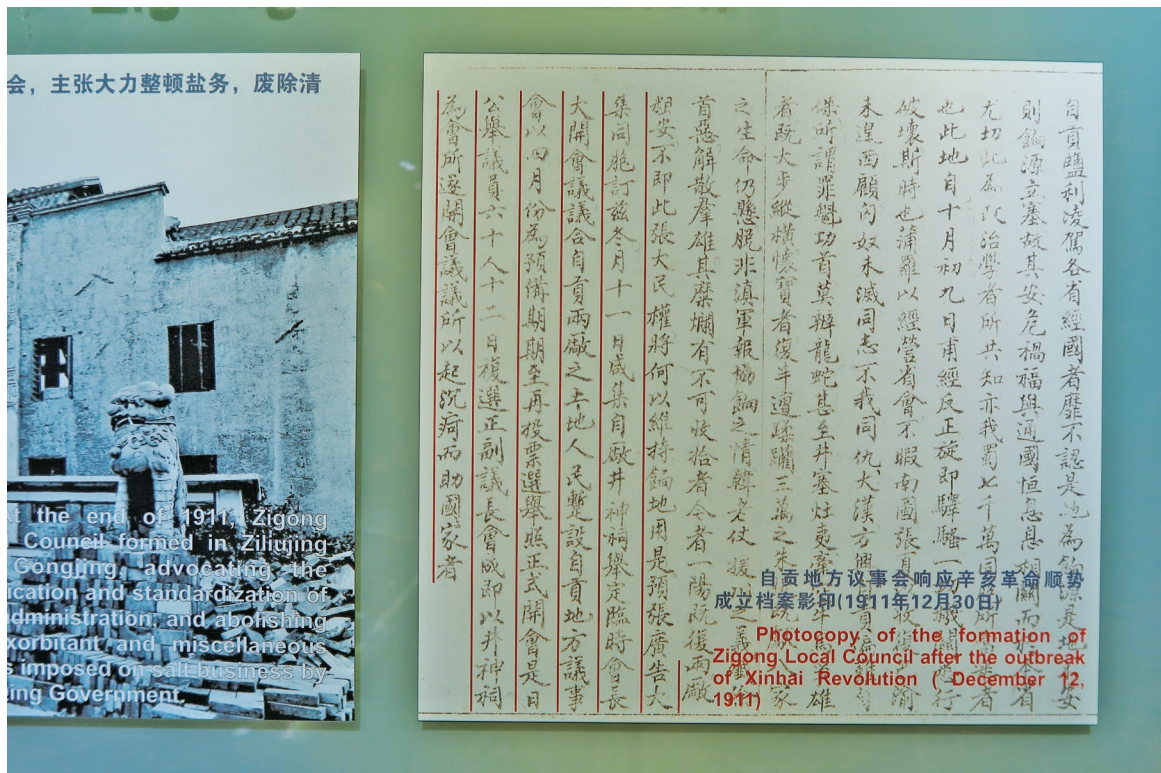
十一日、みなは自廠の井神祠に集まり、……、（議員は六十人）、……、（十二日）、議事会が成立すると、井神祠を会所とし、……（直訳）。

この档案記事によって、自貢近代史の重要な一コマである自貢地方議事会の設立は、自廠、つまり自流井製塩場にある井神祠に集まった人々によって決議され、設立後はそのままその井神祠が議事堂とされたことを知ることができる。辛亥革命という未曾有の事件に直面した自貢の人々が、井神祠とよばれる塩神廟に集って自貢地方議事会という重要な政治機関の設立を審議決定し、しかも以降そこを議事堂としたというこの事実は、自貢が“塩都”であったという事情をまさしく体現しているであろう。塩業は自貢の人々にとって、自らの存立をあらしめているもっとも大きな拠り所であり、井神祠はその拠り所の象徴であったのである。では自流井区に存在したこの井神祠は、どのような沿革をもちどこに存在したのであろうか。

自貢付近の塩神廟といえば、明後日訪問するはずとなっているかつての富順県城（現富順県城）の金川廟が有名である。自貢市街の東南約25キロメートルに位置する現富順県城一帯は、古来四川有数の産



自贡・塩業歴史博物館大門



自贡・地方議事会档案

塩地であり、県城には、早く宋代以前から“金川廟”という塩神廟が設置されていたことが知られている。金川とは塩井の地主であった人物の封号金川王のことであり、金川廟にはその地主である人物と、塩源の発見者とされる梅澤が塩神として祭祀されていたという。ところがその後富順県城一帯の産塩はしだいに減退し、代わって自貢の産塩がしだいに増進するようになり、それにともなう清の道光年間に富順県城のその塩神廟は自貢の自流井に移転したことが判明している。その場所は自流井区を中心部塩水溝であったと伝えられるが、宋良曦先生はそこは“今の自流井区委駐地”であると指摘している（宋良曦『塩史論集』四川人民出版社・第四輯自貢塩業史「自流井起源新証」329頁）。自流井区委駐地とは、中国共産党自流井地区委員会駐在地のことであろうから、解放後もこの井神祠は重要な政治機関の役所となっていたわけである。宋先生がこの文章を発表したのは1983年ということであり、当時、この祠廟が存在していたことは確かであろう。駐地としては使用されていなかったとしても、遺構がほぼ完全な形で残存していたことはまちがいない。ちなみに、塩業歴史博物館の掲げる档案パネルにも、档案文の左側に自貢地方議事会の建物、つまり井神祠とおぼしき建物の写真が添付されており、近年まで残存していたことが写真によっても確認されるのである。

そこで、井神祠、それはかつて共産党委員会の駐在地であったと思うのですが、今のどのあたりでしょうかと訊ねてみたが、楊蕾さんはじめどなたもご存じないらしい。三十年の発展と開発のなかで、痕跡はまったく失われてしまったのであろう。宋良曦先生ならば、あるいは現地に連れていってくださったかも知れないが、残念なことに宋先生は先年物故されてしまった。これ以上の探索は断念しなければならない。

なお自貢の観光案内のなかには、自貢地方議事会は湖広会館（禹王宮）で設立されたという消息を伝えているものもある。これは単なる誤伝なのか、あるいはなにか由来があるのか、残念ながら不明である。湖広会館の沿革を細かくたどれば、井神祠との関係が出てくるかも知れないが、博物館の方々でさえ期待はもてないとおっしゃるのであるから、その詮索はやめたほうがよいのであろう。

自流井の井神祠については、その場所とともにもう一つ気になることがある。それは祀神が金川という封号をもつ塩井の地主と塩源発見者梅澤の二神であったのか、あるいは梅澤一神であったのかという問題である。いいかえれば、富順県から移転した際に二神双方が移されたのか、そうではなく金川は富順県城塩井の地主ではあるけれども、自流井塩井の地主ではないわけであるから、梅澤一神のみが移されることになったのではなかろうかという問題である。これについては、金川・梅澤二神とも移転されたに違いないと判断しているが、その理由は後述に持ちこたいと思う。

档案パネルの前に立ってこのような思索を廻らしていたのは五分あまりであろうと思うが、時間が少し長すぎるのを気にされたのか、楊蕾さんが心配そうに顔をのぞきこまれ、日の暮れないうちに桓侯宮を参観しましょうとうながされた。

桓侯とはいわずと知れた張飛のことであり、したがって人々はまたこの宮廟を張爺廟とも張王廟ともよんでいる。桓侯宮はもともとは屠殺業者たちが建てた同業者会館であるが、その名称は張飛がかつて屠殺を生業としていたという言い伝えに基づいており、始建は清朝前期であるという。屠殺業者すら、かくも壮麗な会館を建造しえたのであるから、清代自貢全体の経済力がいったいどれほどのものであったかが容易に想像されるであろう。その経済力の源泉は、もちろん塩業の隆盛であったはずである。重厚にして美麗な山門をくぐると、正殿・戲台・鍾樓・鼓樓などが目に入ってくるが、建築にうとい素人にも、その工芸的・芸術的価値の高さが十分に了解される。祭儀を終えて談笑し、演劇を楽しんで歓声をあげる屠殺業者たちの、余裕と自信と安心に満ちた顔ぶりが、何だか浮かんでくるようである。俳優たちに負けないようにと、戲台の上から“ジャ～ンフェ～イ”と叫んでみたが、楊蕾さんたちは冷笑するのみであった。

桓侯宮から出て釜溪河に向かう道すがら、三叉路の交差点中央に白い大きな女性塑像が立っているのが目に入った。塩業歴史博物館の正門前に立っていた牧羊女の塑像と一見してまったく同じように見えるが、どこか違うようでもある。それに正門前のそれは白羊と白鹿を従えていたが、ここのものは従えていない。しかしやはりこれはまぎれもなく塩源県の塩女神開山姥の塑像である。おそらく整備工事の際に撤去された正門前の塑像の代替として、三叉路交差点に新設されたものであろう。もしかしたら、博物館

の大改修が完了したあかつきには、この三叉路の塑像は撤去され、再び博物館正門前に新設される計画なのかも知れない。

自流井区のほぼ中心、釜溪河が南北流から東西流に大きく屈曲するところに鎮座しているのが王爺廟である。その祠神王爺は河流を安定させて航路の安全を保証する航運神であり、この王爺廟は、咸豊年間に富裕な塩商たちが資本を集めて建造したことに始まるものであるという。塩商たちが建造したということをもち出すまでもなく、塩都自貢の幹線水路である釜溪河に面しているのであるから、各種水運のなかでも、とくに塩運船舶の順調な航行を祈念して設置されたものであることはいうまでもない。その意味においては、この王爺廟も塩神廟の一種であったといえることができるであろう。光緒年間には、やはり富裕な塩商たちによってあしかけ七年にも及ぶ大改修が施され、壮麗きわまりない構造が造成されたということであるが、現在はそのうちのいくつかの建物が遺構として残るのみである。王爺廟は、航路の保全を神靈に祈念する祀廟であったのはもちろんのこと、販塩商人・塩運商人・運送船主たちが経済情報を交換しあう場所であるとともに、また彼らが文化活動や娯楽活動にいそしむ場所でもあった。残存する戲台の遺構はその娯楽活動のよすがをうかがわせており、川劇上演舞台としての風格を留めている例は、もはやこれ以外ほとんど残っていないという。そこで、ここでもまた戲台に上って“ワ～ンイエ～”と叫んでみようとしたが、あたりはすでに薄暗くなっており、聞いた人は気味悪がるであろうと判断してやめることにしたのは正解であったと思う。なぜなら楊蕾さんたちがやめてほしいという顔つきを見せていたからである。

釜溪河兩岸に灯りがとまり、行きかう大勢の人々もその夜景を楽しんでいる。自貢といえば旧正月の灯会がとくに有名であるが、もちろんその壮麗さには及ばないものの、今眺めている釜溪河の夜景も十分に美しい。ホテルのサービス員さんに、旧正月に訪問したいが交通機関の確保が大変でしょうねと問いかけてみたところ、実は旧正月から五月まで灯会が継続する予定であり、気候のよい時節にぜひ再訪するように勧められた。

翌朝早くに目をさますと、果たして絶好の好天であり、四川の秋天がこんなに晴れ渡るのは、きわめて珍しいという。案内してくださるのは自貢塩業歴史博物館研究員の侯虹先生、それに昨日に続き楊蕾さん、運転手は丁建華夫人、そしてまことに申し訳ないが老体を気遣うことが仕事であると自認されている楊華先生と老体自身、五人がメンバーである。はじめに自流井区の東北、大安区楊家衝上鳳嶺にある吉成井製塩廠遺址にご案内いただいた。吉成井遺址は吉成井・裕成井・益生井・天成井の四塩井からなっており、いわゆる天車をはじめとする各種の施設がほぼ完全な形で残っていて、清代以来の旺盛な産塩ぶりを十分にうかがうことができる。自貢の人々は、大安区の高台にあるこの塩井の天車を、毎日のように仰ぎ見て暮らしていたのであろう。

次に訪問したのは大安区大安街にある樂海井遺址である。道光十五年に開鑿が始まったこの塩井には、その深さが千メートル以上に達するものがあり、塩水だけではなく大量の天然ガスも産出していたという。今は観光地として整備され、製塩施設が保存されている他に、展示室・塩水汲上体験場・煮塩場などが設置され、多くの観光客で賑わっている。一通りの参観を終えて売店に入ってみると、手に手に商品をとる客たちで満員である。なんとか一箱の食塩を手にしたもののそうとうに高価であり、買うか買わないか逡巡しているうちに、丁建華夫人が客をかき分けるように入ってこれ、あつというまに三箱を購入されたのには驚いたが、そのうち二箱を拙宅への土産として手渡されて、さらに驚くことになった。試供品を舐めてみると、樂海井の塩は確かに美味しい。貴国では塩を舐めつつ清酒を含むそうですが、この塩を舐めればよりいっそう清酒の風味が引き立つでしょうと丁夫人がおっしゃったのに対して、この塩にみあうような高級清酒を買う経済的余力はありませんと応えたところ、楊華先生が隣から安酒を五回くらい我慢すれば何とか買えるでしょうと合いの手を入れられ、大笑いとなったことであった。

ついで釜溪河の南岸に渡り、張家沱の塩井遺址を探ることにした。遺址といっても今は何も残っていないのであるが、釜溪河に面するその立地だけは確認することができる。碼頭が隣接しているのであるから、運搬の時間と費用が省けてきわめて有利な立地であったことはまちがいない。川べりから上流をながめると、左手にいくつかの高層ビルが並んでいるが、その向こうが自流井老街である。かつての中心市街であ



自貢・桓侯宮山門



自貢・桓侯宮正殿



自貢・王爺廟



自貢・王爺廟戲台



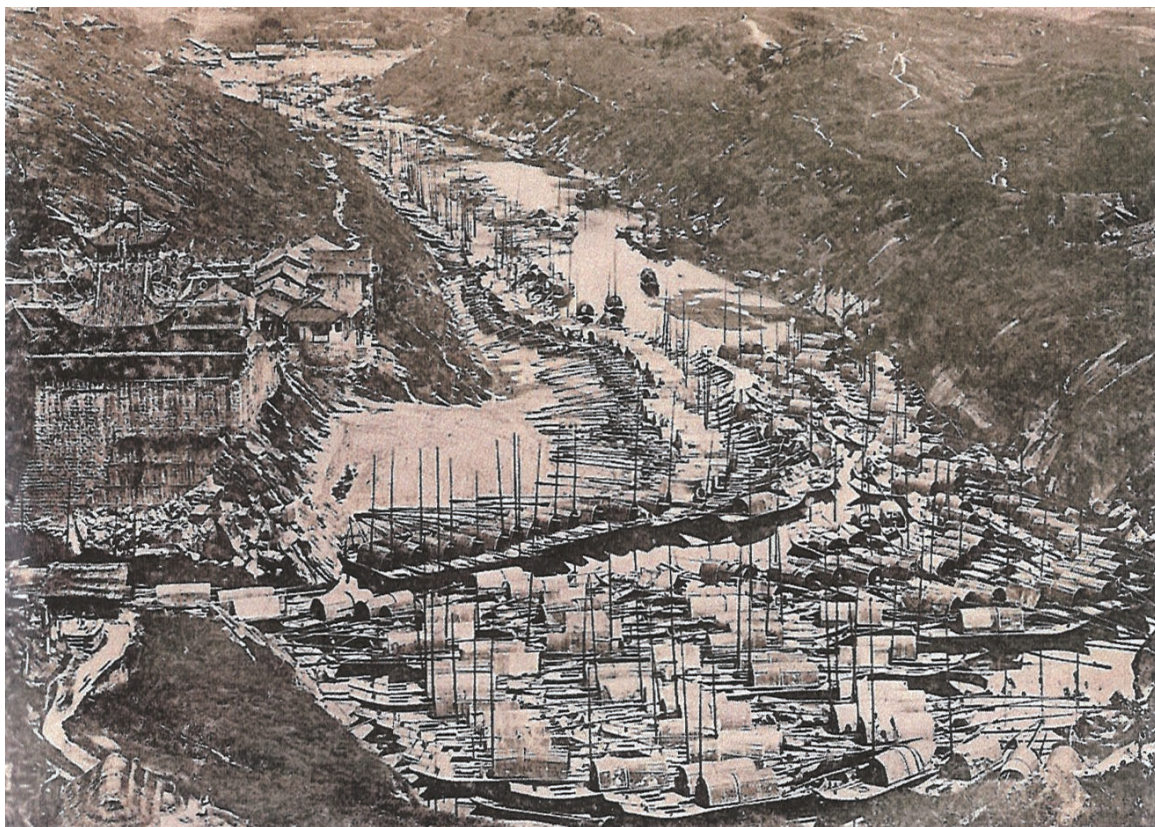
自貢・吉成井天車



自貢・榮海井煮塩場



自貢・釜溪河（張家沱から上流を望む）



自貢・釜溪河王爺廟段塩運船

り、路辺井・銭川井・栄華井・四望井・火龍井などの遺址が今も残っており、古い町並みが復原されて保存と観光に供されているという。釜溪河塩運の繁栄を伝えるものとしてしばしば引用される、『四川塩政史図冊』（1932年・呉煒等纂）に採録された王爺廟兩岸の写真には（1906年撮影）、隙間もないほどに雲集する塩運船が写っているが、そのやや上流のこの自流井老街～張家沱の兩岸にも、同じように隙間もないほどに塩運船が雲集していたことであろう。

午前中に大安区・自流区での参観を終えて、午後は貢井区での参観である。まず自貢の西洋式建築として有名な張伯卿公館を散策したのち、天池山に上って山頂にある天池寺を参観した。元の至順年間、翁信禅師の開基によって建造されたと伝えられ、一時の衰退をへて、明の洪武年間には如来殿、清の順治年間には大雄宝殿が建てられたことで知られている。ただ清代晩期～民国の混乱期は長きにわたって衰退期が続き、近年ようやく修復が施されて往時の面目が回復されたという。天池という名称は、大千ばつの時でさえ水が涸れなかった水池にちなむというが、寺内に今も存在する池塘がそれなのかどうか、僧侶ですらわからないということである。聖地峨眉山に南方から向かう人々は、その途中必ずこの天池寺に立ち寄って参拝したという。天池寺での参拝を終えた人々は、山頂とはいえさすがに目視はできないけれども、誰もが必ず峨眉山の方向に向かって両手を合わせたことであろう。

天池山の東麓を南北に走る天池路の東側は、旭水河西岸に向かってかなり急な斜面となっている―旭水河とは釜溪河の上流部分の名称であり、その名称は貢井区部分から始まるらしい―。まず参観したのは陳家祠堂である。陳家祠堂というからには陳氏の祠堂であったに違いないが、この建物にはかつて県の貢井分所が置かれ、県丞が駐在して製塩・塩運・販塩の管理にあたっていたという。貢井分所となったのが先か、陳家祠堂となったのが先かはっきりしないが、どうも貢井分所となったのが先であるらしい。

陳家祠堂から下ると道は北に折れて、そのまま旭水河西岸沿いに伸びる街路につながっている。これが貢井老街塩道である。清の康熙・雍正年間、このあたりには三百口あまりの塩井が存在したが、汲みだされる塩水があまりにも大量で汲水地での煮沸が追いつかなくなり、清代晩期以降は、竹筒をつなぎあわせて数十里にも及ぶ輸水管を設置して自流井区まで輸送し、そこで煮沸するほどであったという。北に折れてすぐのところに「全国重点文物保護単位：茶馬古道・貢井老街塩道」と刻まれた石板が立っている。貢井老街塩道はかつて人と物がいきかい、旅舎と商店が立ち並ぶ一大繁華街であったのである。今はほとんど人通りがないけれども、清掃の行き届いた石畳道路を見つめるうちに、何かしら往時の熱気がよみがえってきたように思われたのは、老人にありがちな錯覚にすぎなかったのであろうか。

文物保護単位の石板から北へ十分あまり歩いた左側に、「千年塩都溯源工程之大公井遺址遺迹勘探調査」という看板の掲げられた遺址が存在している。自貢塩業発祥の塩井とされる大公井である。その開始は北周武帝の時であると伝えられ、そうだとすると実に千五百年の歴史をもっていることになる。もっともかなり早い段階で廃棄されたようであり、唐代に機能していたことは確かであるものの、それ以降存続したかどうかははっきりしていない。今現に発掘している遺構はいつのものなのか、発掘調査の当事者たちは唐代と考えているらしいが、これも確定はしていないという。現状をみる限り、発掘調査は長期間にわたって中断しているらしく、再開がまたれるところである。

大公井遺址から少し高台に上って南を見やると、旭水河のたおやかな流れをのぞむことができる。右手つまり左岸の木陰に見えているのが、おそらく熊家沱の碼頭である。この碼頭は貢井産塩の積み出し港として繁栄を誇ったことで知られており、その最盛期には、王爺廟兩岸に勝るとも劣らないほどに塩運船が雲集していたことであろう。

貢井老街の散策を一通り終えて、再び天池路にもどることになったが、今度は上り坂であり、歩みは遅くならざるをえない。楊華先生と楊蕾さんが心配そうに見守ってくださるが、しかしここで歩みを止めるわけにはいかない。なぜなら、向かう先は貢井塩神廟の遺址だからである。富順県城から移転した自流井の塩神廟は井神祠とよばれ、その建物は近年まで残存していたものの、今は場所すら不明であるという情報はかなり以前に得ていたが、貢井にもかつて塩神廟が存在していたという情報は、ごく最近半年ほど前に偶然手にしたものである。偶然とは他でもない、インターネットサイト『維基百科』の「自貢移民文化」



自貢・天池寺



自貢・陳家祠堂戲台



自貢・旭水河熊家沱段



自貢・貢井老街塩道



自貢・大公井遺址

を開いていてまさしく偶然に見つけたものであり、また同じころ楊華先生も気づかれたらしく、旅行者の手になる訪問手記を探し出されて、事前にそれを恵送していただいていたのである。その手記には“井神廟”というプレートの掛かった建物の写真が添えられている。自流井の井神祠が所在不明である以上、自貢に存在した塩神廟の遺址探索は、場所がはっきりしているこの貢井井神廟の訪問にかかってこざるをえない。その訪問は、今回の自貢訪問のもっとも大きな目的なのである。

その気持ちを察してなのかどうか、侯虹先生は天池路北側の階段をかけ上っていかれる。先生は民居から出てきた老婆と話し込んでいたが、向かいを指さして、ここが井神廟の遺址であり、つい近年まで祠廟も存在していたらしいと、大きな声で説明された。石組みの重厚な建築基壇の下側から右手に入ると、赤レンガの廃屋があり、入口右手に「自貢市貢井区文物保護点・井神廟」というプレートがかかっている。この廃屋自体は実は井神廟とは何の関係のない近年の建物らしく、それすら廃屋となっているのであるから、井神廟時期の建物となると残念ながらもはやまったく残っていないということであろう。重厚な建築基壇から、その上に存在した壮麗な建築を想像するしかないというものである。

侯虹先生の解説にいくつかの事前調査の結果を合わせると、この井神廟について次のような基本情報を得ることができる。

- 一 設置場所は現在の老鴿坡であり、始建は清の嘉慶年間である。
- 二 面積は二千平方メートルである。
- 三 貢井の塩商たちが建議して創建されたものであり、彼らの集う会館でもあった。
- 四 祠神は顔蘊三と梅澤の二神とも、そうではなく梅澤一神のみともいわれる。

顔蘊三とは、塩業歴史博物館の紹介パネルによると、清末の塩業労働者で、塩井の掘削・固定・修理に用いる工具に画期的な改良を加えた人物として知られ、その功績のゆえに彼の死後、塩井労働者たちは塩井の傍に彼の名を記した木牌を安置し、顔蘊三神霊の加護を祈ったと伝えられている。清末というのは具体的にはいつなのかははっきりしないが、その死後に一種の塩神として塩井労働者たちに信奉されるようになったというのであるから、その神格化は清末からさらに民国時期に下がる可能性が高いであろう。そうすると貢井井神廟が創建されたとされる清代中期後半の嘉慶年間に塩神顔蘊三が存在したことはありえないことになるし、いやそもそも顔蘊三はまだこの世に生まれていなかったかも知れないであろう。したがってもし貢井井神廟が塩神顔蘊三を供奉したことが事実であるとするなら、それは井神廟が創建されてかなりたってから新たに供奉されたことにならざるをえないはずである。

ちなみに博物館の紹介パネルでは、顔蘊三は“王三畏堂”の雇員であったと記されている。王三畏堂とは清朝～民国時期における自貢最大の塩業集団であり、『中国塩業史辞典』（上海辞書出版社・55頁）は、十九世紀中期中国最大の工場制手工業資本集団であったと紹介している。顔蘊三はその雇員であったのであるから、王三畏堂が塩神顔蘊三を貢井井神廟の祀神にしようと思論んだことは十分考えられるし、その圧力と支援力をもってすればそれは至極容易であったろう。顔蘊三の貢井井神廟への供奉には、王三畏堂の意図が深くかかわっていたと思うのであるが、どうであろうか。

ほんとうに顔蘊三が供奉されたのかどうかという基本的な事実関係を含めて、実際のところはどうであったのか、今となっては関連資料はほとんど残っていないのが実情であり、以上の想定は想像の域を出ないが、ただ、顔蘊三という一人の塩業労働者が、生前の功績によって死後塩神化したという事実、また当初は塩井労働者個々に信奉されていたものが、ある時点でいわば格上げされて貢井井神廟の祀神として供奉されることになったという可能性の存在、こういったことを確認することができたこと自体は、中国塩神の多元性や塩神縁起の多様性という中国塩神信仰の特色を考えるうえで、一つの収穫であったと思う。

次に梅澤については、自流井の井神祠で供奉されていたことはすでに確認しているのであるが、この貢井井神廟でも供奉されることになったいきさつを推測するにあたっては、その前提として、現在に至るまでの自貢市の行政沿革史を少しく整理しておかねばならない。

清朝時期をほぼ一貫して、自流井は富順県に属する地方の辺鎮であり、貢井は榮県に属する地方の辺鎮であった。富順県の中心城市である富順県城は、自流井の東南約二十五キロメートル、釜溪河・沱江合流

点やや上流沱江沿岸の現富順県城（富世街道）、榮県の中心城市である榮県県城は、貢井の西北約二十五キロメートル、釜溪河（榮溪河）上流沿岸の現榮県県城（旭陽鎮）であった。自流井と貢井は直線距離でわずか五キロメートルしか離れていないにもかかわらず、行政上はそれぞれ別個の県に属していたのである。先に貢井にはかつて県の分所が置かれていたことに言及したが、その県とは榮県に他ならない。

この行政上の情況は、自流井と貢井が辺境の小鎮であったころにはあまり問題とならなかったであろうが、両井の塩業が増進して、それぞれの経済力がしだいに富順県城と榮県県城のそれをしのぐようになってくると、当然問題になってきたであろう。一つは、近接する両井は産業構造上一体化しており、異なった行政区画に属するのは不自然であるという意味において、一つは、県城より繁栄している以上、県に属する辺鎮扱いには不自然であるという意味においてである。したがって、自貢の人々にとって独立といえ、行政的には富順県・榮県の所属から離れて自流井鎮と貢井鎮を合体させ、県より上級の行政単位へ昇格することであった。この動きはすでに清朝のかなり早い段階化から活発化していたようであるが、実現は容易ではなく、清末・民国期の紆余曲折をへて、自流井区と貢井区を主要な行政区画とする“自貢市”がようやく成立したのは、民国二十八年（一九三九年）のことである。自貢の人士による臨時地方議事会が結成された一九一一年の段階では、実質はともかく、自貢市という行政体はまだ成立していなかったのである。その後、いくどかの行政区整理が実施され、現在では自流井区・貢井区・大安区・沿灘区からなる自貢市と、自貢市に属する富順県・榮県からなる行政配置が敷かれていることは周知のところであろう。かつて自流井と貢井を属下に置いていた富順県と榮県は、今では自貢市の属下に置かれているわけである。

さて、釜溪河流域と釜溪河・沱江合流点一帯は、古くから産塩地が分布しており、また両河をはじめとする塩運網が縦横に張り巡らされていた。当然そこでは塩神伝説というものが生じていたであろう。残存する文献伝承による限り、梅澤伝説はそのうちのもっとも有名なものであったに違いない。その伝説とはおよそ次のようなものである（前掲『中国塩業史辞典』479頁など）。

梅澤はもともと夷人である。晋の太康年間のある日のこと、彼は狩にでかけたが、石の上に泉が出ているのに気づき、舐めてみると辛かった。そこでそこを掘ってみたところ、三百尺で塩泉が湧き出てきて、煮詰めて塩を作った。こうして塩源が発見されて、住民は塩利を享有できるようになった。彼の死後、政府は祠廟を建てて祀った。

この伝説の発生地がどこであったのかははっきりしないが、すでに宋代以前に富順県城（現富順県城）に祠廟が置かれていたことからすると、富順県城あるいはその付近が発生地であった可能性は高いであろう。そしてその塩神梅澤信仰は、釜溪河流域・沱江流域の各地に広がっていったと思われるが、ただその祠廟自体は少なくとも明代までは富順県城以外には設置されなかったようである。ところが、すでに述べたように清代に入って自流井の産塩が富順県城のそれをしのぐようになると、ついに道光年間にその祠廟は自流井に移転させられることになった。自流井はあくまで富順県属下の辺鎮に過ぎないという行政上の上下関係に変更はないけれども、重要な塩業信奉施設である塩神廟は県城から辺鎮に移ってしまったのである。

この場合、移転とはどのような処置をもって実施されたのであろうか、具体的にいえば金川神・梅澤神という二つの神像は、どのように処置されたのであろうか。塩源発見者の梅澤神を外すわけにはいかないであろうが、金川神は富順県城塩井の地主なのであるから、自流井にとっては必ずしも不可欠ではないのではなかろうか、という想定のもとに可能性をあげてみると、富順県城塩神廟の二神像はそのまま残したままで、自流井井神祠には新たに作製した二神像を安置したというのが一つの可能性、富順県城塩神廟の二神像はそのまま残したままで、自流井井神祠には新たに作製した梅澤神像のみを安置したというのが一つの可能性、富順県城塩神廟の二神像を運び出し、自流井井神祠に運び込んで安置したというのが一つの可能性、富順県城塩神廟から梅澤神像のみを運び出し、自流井井神祠に運び込んで安置したというのが一つの可能性である。

実は丁宝楨等纂『四川塩法志』巻五・井廠五・沿革下附祠廟「富順県金川廟」の項には、

咸豊八年、総督王慶雲が奏請して、……、金川王には普惠という封号が与えられ、梅（澤）神には普護という封号が与えられた。……（直訳）。

という記事があり、咸豊は道光の次の年号であるから、ここにいる金川神と梅澤神は道光年間に富順県城から自流井に移転した後の自流井井神祠の祀神でなくてはならず、つまり自流井井神祠には金川神像と梅澤神像の二神像が安置されていたことになる。梅澤一神のみではなく、金川・梅澤の二神が移されていたわけである。考えてみれば、二神が安置されている祀廟を移転するに当たって、一神のみを移すというのは手続き上面倒であつたろうし、自流井が富順県城をしのぐ経済的実力を誇示しようとするのであれば、一神のみを移すというのは片手落ちというものであろう。ともかくこうして、四つの可能性のうち、梅澤一神のみが移されたとみなす二つの可能性は却下されることになる。そこで、可能性は二神の神像を残したままで、新たに作製した二神像を移転先に安置したのか、そうではなく二神の神像自体を持ちだして移転先に搬入したのか、二つに一つということになるが、これについては遺憾ながら、現段階で関連記事を発見できないでいる。

いずれにしろ、もし二神像自体が自流井の井神祠に持ちだされてしまったとすれば、富順県城の人々の喪失感はどういうに大きかったであろうし、もし二神像が残されていたとしても、新建の自流井井神祠に二神像が新設されたという事態を前にして、釈然としない気持ちが大きくつものたことであろう。神像が残ったにせよなくなったにせよ、この移転以降、富順県城の塩神廟が急激に衰退していったことは想像に難くない。富順県城塩神廟に関する道光以降の消息がほとんど伝わらないのは、この急激な衰退が一要因となっていることはまちがいないであろう。

道光年間における、塩神梅澤の富順県城塩神廟から自流井井神祠への移動事情を以上のように整理した上で、嘉慶年間創建の貢井井神廟に塩神梅澤が供奉されるにいたったいきさつを考えてみなければならない。嘉慶は道光の前の年号であるから、貢井井神廟創建の時点では、まだ富順県城塩神廟から自流井井神祠への移転という事態は生じていなかった、つまりまだ富順県城塩神廟は存在していたはずである。このことは、貢井井神廟がその創建時点で、そうしようと思えば富順県城の塩神廟を移転させてくることが不可能ではなかったことを意味するが、しかしそうはしなかった。だからこそ、依然として富順県城に存在していた塩神廟を、次の道光年間に自流井井神祠に移転させてくることになったのである。貢井井神廟と自流井井神祠で、祀神の設定事情になぜこのような相違があるのか、想像をたくましくすれば次のような推測が可能なのかも知れない。自流井は行政上は富順県属下の辺鎮であり、富順県城から自流井鎮への塩神廟の移転は、同じ県域内における移転に他ならず、手続きは複雑であつたろうが、なんとかそれが可能になったのに対して、貢井は富順県ではなく榮県属下の辺鎮であり、富順県城から貢井鎮への移転は県外への移転ということになってしまい、それは手続き上ほとんど不可能であつたのかも知れないという推測である。この推測の可否を決定するには、そのような時間をかけて関連記事を搜索する必要があるが、はたしてどれほどの時間がかかるのか、現時点では見当もつかない。

ということは、貢井井神廟への塩神梅澤の供奉は、富順県城塩神廟の梅澤供奉から直接の影響を受けることなく、いわば独自に決定されたのではなかろうか。もちろん富順県城塩神廟の祀神事情をまったく意識しなかったわけではなかろうが、梅澤は釜溪河—沱江—帯におけるもっとも有名でもっとも広範に信奉されている塩神なのであるから、すなわち塩神梅澤はもはや富順県城の独占物ではなく、今や釜溪河—沱江—帯共有の塩神となっているのであるから、各地のどの塩神廟もこれを供奉してよいはずであるという単純な判断のもとに、供奉することにしたのだと思うのである。その際、おそらく富順県城塩神廟の金川王は取り上げられなかったと想定される。貢井井神廟に金川王が供奉されていたという記事や伝承は、どこにも存在しないからである。富順県城塩神廟では梅澤と共祀されていたものの、本来富順県城の塩井地主神である金川王は、貢井の塩商や塩業労働者にとっては供奉に値するほどの親密な塩神ではないという判断によつたのにちがいない。そしてその後そうとうの年月をへて、塩神顔蘊三が共祀されることになったと思われるのであるが、彼が取り上げられた理由を推測することは容易である。顔蘊三は自貢の塩業労働者であり、いわば当地出身の塩神なのであるから、彼を貢井井神廟の祀神に設定することに、自貢の人々が異存を唱えるはずがなかったからである。あるいは一抹の可能性として、顔蘊三が自流井ではなく貢井の労働者であつたならば、この推測はより確実性の高いものになるであろう。どなたかが関連資料を提供

してくださるのを、ひたすら待つことにしようと思う。

嘉慶年間にこのようにして貢井井神廟が創建されてほどなく、次の道光年間に自流井井神祠が創建されることになった。ただその創建は、貢井井神廟が独自に新設されたのとは違って、富順県城の塩神廟を移転させてくるという形で実行された。独自の新設も可能であったはずであるが、なぜ移転という形をとったのか、ここまでの想定をふまえれば、理由として少なくとも次の三点をあげることができるであろう。

- 一 同県域内に二つの塩神廟を設置するには何らかの支障があり、旧地から新地への移転でもって一県域内一塩神廟という制限にいちおう従おうとしたこと。
- 二 富順県城の塩神廟は宋代以前の創建と考えられる、もっとも正統的でもっとも由緒正しい塩神廟であり、その正統的で由緒正しい塩神廟を自流井の現地に設置することを自流井の人々が強く希望したこと。
- 三 自流井の人々がその経済的実力を背景に実現しようとしたものは、政治的にいえば実質的な県域化であり、富順県城の塩神廟をいわば奪いとってすることで、その実質的な県域化の一端を示そうと考えたこと。

こうして自貢では清朝中期後半の段階で、貢井の井神廟と自流井の井神祠が並び立つことになった。貢井と自流井は古くから、経済上・産業上・地理上一体的なものとして存続してきており、双方居民の一体感もそうとうに強く、ついには両者を行政的に合体させた自貢市の成立に到るのであるが、一方で同じ有力な産塩地として相互をいわばライバル視する感情も当然続いていたであろう。その感情には、両者の経済力がどちらもきわめて大きいだけに、相当強いものがあつたはずである。したがって、どちらか一方にしか塩神廟が存在しないというのは、存在しないほうの住民感情からすればありえない事態である。貢井の井神廟と自流井の井神祠が、あまり時をおかずに創建された背景には、そのような感情が一つの理由としてはたらいていたことはまちがいない。

なお、以上の想定は貢井井神廟の始建が嘉慶年間であるという前提のもとに進めてきたものであるが、この嘉慶年間の始建であるという所伝が百パーセント確実であるかどうかは、今一つ定かではない。ただたとえ、たとえば貢井井神廟の創建が自流井井神祠のその後であつたとしても、貢井井神廟の祀神の選定が、富順県城塩神廟の祀神状況やその富順県城から自流井への移転という事情からは直接の影響を受けることなく、いわば独自に行われたという想定自体を変更する必要はないと思う。

貢井井神廟のプレートには「自貢市貢井区文物保護点」という表示があり、そうであれば自貢の文物機関はこの祠廟の沿革について相応の情報をもっているであろう。今回は時間切れであつたが、今後侯虹先生たちの協力をえて、それらの情報を収集して始建時期をはじめとする基本事項について、もう少し確かな資料を手にしなければならない。

貢井井神廟を背にして貢井老街を見下ろすうちに、このような考えが浮かんできたのであるが、ふと気づくと丁建華夫人が階段の下から手招きされている。最後にもう一度天池路の東側の下って、いくつかの遺址を参観するのだとおっしゃる。雍正年間に創建された貴州商人の会館である貴州廟（榮祿宮）、ついで光緒年間に創建された広東商人の会館である嶺南会館（南華宮）などを参観して予定の行程を終了し、帰路につくことになった。何路というのだろうか、貢井のかつての繁栄を偲ばせる一条の老街を、楊華先生と侯虹先生が先に進んでいかれる。楊華先生の万歩計によれば、今日一日の歩行距離は二十キロメートルであるという。丁建華夫人の運転による走行距離は、おそらく六十キロメートルであろう。侯虹先生も楊蕾さんも、ほんとうに熱心にそれぞれの遺址を解説してくださったが、残念なのは、老体の中国語能力が劣悪で、三分の一ほどしか聞き取れなかったことである。お二人に申しわけない。したがって、以上の記事には重要な事項が抜けている可能性があるが、気力・体力・知力ともに衰えた老体に免じて、ご容赦願いたいと思う。

自流井井神祠と貢井井神廟がごく近年まで残存していたことを確認し、それぞれの設置のいきさつを、両者のその対比のもとに明らかにすることができたのが、今回の自貢訪問の第一の大きな成果である。それはひとえに楊華先生・丁建華夫人・侯虹先生・楊蕾さんのおかげに他ならない。車中から旭水河の夜



自貢・貢井井神廟遺址



自貢・貢井井神廟基壇



自貢・貢井老街風情



自貢市区

景をながめつつ、心中、深い感謝の意をささげたことであった。

翌朝目をさますと、またもやカラリと晴れている。楊蕾さんが、先生は運氣が強いですねとおっしゃるが、そうではなく楊蕾さんのやさしい心遣いがこのような好天をもたらしてくれたのである。丁建華夫人が運転する車は、釜溪河の西岸を順調に南下し、三十分ほど走ったところで釜溪河を東に渡り、橋のたもとで停車した。ここは釜溪河流域有数の古鎮、鄧井関である。古くから井塩の産出で知られ、鄧井という地名は、早く宋代以前に鄧姓の人物がここで塩井を開鑿したことにちなむものであるという。かつての鄧井関は産塩地であるとともに、また釜溪河・沱江水運の要衝であり、釜溪河・鉄線溪の両岸にはおよそ五キロメートルに亘って各種の船舶が隙間なく集まり、その数は千艘をゆうに越えることもあったという―鉄線溪というのは西から釜溪河に流入する一支流であるらしい―。こう解説してくださるのは富順県文物研究所副所長の王毅先生である。先生は釜溪河の河岸を指さして、あのあたりが塩井、このあたりが碼頭と示されたのち、往時の繁栄を伝える遺址はほとんど残存せず、古鎮の老街にもそのよすがは留められていないと、残念そうに強調された。確かにそうであるのかも知れないが、ただ軒を連ねる商店や道行く人々の混雑ぶりを見ていると、商業活動は今もそうとう活発であるように思われてくる。塩業と水運で培われた進取の精神はまだ脈脈と生きているのではなかろうか。ちょうど授業中なのか、鄧井関小学校の校舎からは児童の声が聞こえてきたが、彼女ら彼らによって鄧井関発展の明るい未来が開かれることであろう。

鄧井関から東行して十分ほどで右手に沱江の流れが見えるようになり、富順県城に入ったことがわかるが、流れを溯って北向きに屈曲する、すぐ手前の北岸に鎮座しているのが有名な富順文廟である。北宋慶曆年間の始建と伝えられるこの富順文廟は、その建築の壮麗さにおいて四川、いや中国南方屈指であると言われ、富順の人々の第一の自慢となっている。まずは状元橋を挟んで聳える樞星門がとてつもなく厳粛でとてつもなく大きい。ついで大成門が現れて、くぐって大成殿の前に出るのであるが、その建築の規模と仕様は、おそらく本場曲阜のそれに匹敵するであろう。そして殿中の孔子像は、まばゆいほどに神々しい。もっともこの像は近年新たに建造されたものであって、かつての風采をどれほど復原しているかはわからないけれども、しかし往時もほぼ同様の様子であったと考えてまちがいであらうと、王毅先生は自信をもって解説される。大成殿の裏手は崇聖祠であり、孔子の祖先が祭祀されたところである。そのプレートの説明は次のようになっている。

富順文廟の崇聖祠は、また啓聖宮ともよばれ、元の至治元年（1321年）に創建されたもので孔子の祖先を祭祀するところである。囿廊式・三室式の構造をもち、幅19メートル・奥行14.2メートルである。のちには儒学を講義する場所としても使用されるようになり、周延俊は富順で知監にあった時にここで講義をしたし、富順最初の進士李冕もまたこの講堂の出身である。こうして富順の文風は大いに盛んになり、明の万曆丙戌の試験では富順から実に七名もの進士合格者が出て、当時一大センセーションを巻き起こしたものである。李氏と熊氏の両家がとくに有名で、李氏は四人、熊氏は五人の進士を出している。その一人熊過は“西蜀の四大家”・“嘉慶の八才子”の一人に数えられており、富順が“才子の郷”とよばれたのはここから来ている。崇聖祠の屋根瓦は琉璃瓦であるが、その色は緑色である。文廟のなかのその他の建築の屋根はすべて黄色であるが、それは孔子がのちに“文宣王”に封じられて帝王の待遇を受けたため黄色を用いることができたからであり、一方孔子の祖先は王に封じられなかったため、緑色を受けることに甘んじるしかなかったのである。等級制度の厳格さを、ここにもみることができるであろう（意識）。

壮麗な文廟を建設し、多くの進士を輩出せしめたのは、もちろん富順県城の経済力であり、その経済力を支えていた中心的な産業は、いうまでもなく塩業であった。富順県城及びその周辺には数多くの塩井が存在し、宋代以前から元・明・清と長期にわたって豊富な産出量を誇っていたことが知られている。もっともすでに述べたように、清代に入ると自貢自流井の増進とあい表裏してしだいに衰退していくのであるが、どうやらその衰退のきざしはすでに明代に生じていたらしい。したがって、富順県城及びその周辺における塩業の繁栄期ということになれば、宋代以前から元をへて明代ごろまでということにならう。富順県城内に設置された金川王と梅澤を供奉する塩神廟は、宋代以前に創建されたと考えられ、少なくとも清



富順・鄧井関



富順・文廟大成殿



富順・文廟櫺星門



富順・文廟孔子像



富順・文廟崇聖祠

の道光年間まで存続していたのであるから、その存続期間は富順県城及びその周辺に展開した塩業の繁栄期にほぼ重なることになるであろう。富順県城塩神廟は、その存続期間において、まさしく当地塩業の繁栄を象徴する祠廟であったのである。

さてその塩神廟はどこに存在したのであろうか。『大清一統志』巻三九六・叙州府二・祠廟・金川神廟は、“在富順県西二百余、…、九域志、蓋井神也、…”という記事을載せており、この記事は、先に引用した『四川塩法志』「富順金川廟」の項も転載している。ここにいう“県西”の県とは県衙のことであろうから、問題の塩神廟は清の富順県県衙の西二百歩ほどのところにあったといっているのである。二百歩はおよそ三百メートルである。そうすると清富順県城のかつての県衙の位置さえ判明すれば、塩神廟のおよその位置もわかるというわけであるが、県衙の位置について何の事前調査も実施せずに、ここ富順県城に来てしまったことを白状しなければならない。というより、素人がやみくもに試みてもどうせ結果は得られないであろうから、ここは現地の専門家に直接聞くほうが確実であると、安直かつ横着に考えたのがほんとうのところである。

今この時点における現地の専門家といえば、もちろん王毅先生をにおいて他はない。ところが王毅先生がかなりの早足で進んでいかれるため、追いかけるのが精いっぱい、声をおかけすることができないうちに、とうとう文廟を出て景勝地西湖南岸の西湖広場までいきついてしまった。そこで先生は、一枚の大型案内板を見るように勧められた。「導遊全景図」という富順県城の観光案内図である。おそらく先生はこちらの意図を察しておられて、解説の代わりにこの案内図を提示されたのにちがいない。はたして文廟崇聖祠の西五十メートルほどの地点にマークが打たれ、赤字で“古県衙”とはっきり示されている。そこには東北から西南にかけていくつかの建築遺構が残存しており、文廟博物館もその一画を利用して施設としているらしい。ここが清富順県城県衙の位置なのである。そこから西へ三百メートルというと、今立っている西湖広場からもう百メートルほど西であるはずであり、そこで案内図を東から西へたどっていくと、大きなロータリーにマークが打たれ、“富世塩井”という表示がある。ここが有名な富順県城内の塩井、富世塩井（富義塩井ともよばれた）の遺構の現場なのである。古県衙の西五百メートル、西湖広場の西三百メートルというところであろうか。つまり、古県衙の西三百メートルあたりに存在したという富順県城の塩神廟は、西湖広場と富世塩井遺構の間のどこかということになろう。ただもちろん今は何の痕跡もなく、場所がどこであったかさえ不明らしいと、楊華先生はおっしゃる。自流井へ移転した道光年間から数えれば二百年近い歳月が流れているのであるから、いたしかたないところであろう。

さらに西へ進むと、ロータリーの中央に塩水を汲みだす一基の天車が見えてくる。その下が富世塩井の遺構に他ならない。遺構といっても地上には何も残っておらず、一基の天車も、ここが富世塩井の現場であることを示すためにいわば標識として近年立てられたもので、往時の天車の遺構ではないという。総じていって、富順県城内外の塩業遺構は残存数がそれほど多くなく、考古発掘もまだまだ手つかずの状態のようであり、自貢のそれらがあまりにも豊富にだけに、どうしても寂しさがつのってこざるをえない。もっとも市街の開発と観光地化が急速に進んでおり、富世塩井の塩業施設が復原され、塩神廟も立派なものが再建される可能性がないというわけではない。そうなった折には必ず再訪したいと思うが、それまではたして老体の身体がもつかどうかは、神のみぞ知るといふものである。

富順県城塩神廟のおよその位置を確定し、富世塩井遺構の現場を訪ねることができたのは、一つの収穫であった。こういった収穫は、やはり現地調査でなければ得られるものではない。自貢からわざわざ足をのばして富順まで連れてきてくださった、楊華先生と丁建華夫人にあつく御礼申し上げたいと思う。

ひととおりの参観を終えて、市街レストランでの昼食となった。まず手をつけたのは“富順豆花”である。その起源は、井塩の純度をあげるために“豆汁”を注入したことに始まるとされ、改良に改良に加えて現在の富順豆花に至っているという。形状は“おぼろ豆腐”に似ているが、固さは木綿豆腐とプリンの間というところであろうか。民国富順県の人劉錫禄の改良にかかる製品がもっとも美味しいということであるが、熱々の豆花をつけだれに入れて次々とはおぼるうちに、あまりの美味しさにどこの製品かお聞きするのを忘れてしまったのはうかつであった。次に手をつけたのは菟肉料理である。そういえば自貢でも試みたは



富順・導游全景圖



富順・富世井遺址天車

ずであり、四川のなかでも釜溪河・沱江一帯はとくに好んで食べるという。自身も山村出身で子供のころ食べたことがありますよと言いながら、細切りの炒め物を三口ほど賞味したことであった。

昼食を終えて、ここで楊蕾さんとお別れである。自貢へ帰る楊蕾さんを見送って、さて名残はつきないが富順を離れて瀘州空港に向かわねばならない。秋晴れの高速道路を一路南下して一時間もしないうちに瀘州雲龍空港に到着し、ここで楊華先生・丁建華夫人ともお別れすることになった。中国国内での活動に、今までいったいどれほどのご支援を頂戴したことであろうか。ご夫妻と知り合うことができたのは、おおげさに言えば、わが半生の幸運といってよいであろう。深々と一礼して、重慶への帰路につく車を見送ったことである。

瀘州発南京行きのフライトは順調に航行し、午後七時に南京禄口空港着、空港隣接のホテルに入ったのは八時前であった。

＊

四川の自貢から江蘇の塩城へはどのような行程が至便であろうか。高铁の時刻表やフライトスケジュールを検索しながらあれこれ思案した結果、瀘州空港から南京空港へ飛び、南京からは高速バスを利用するのがベターであると判断することになった。一つだけ誤算であったのは、運行しているのではないかと期待していた南京禄口空港から塩城への直行高速バスは数年前に停止しており、宿泊した空港隣接のホテルから市内のバスターミナルに移動しなければならないことであったが、南京汽車客運站まではタクシーでわずか二十分であり、時間のロスはほとんど生じることがなかった。南京市内にはいくつかのバスターミナルが配置されているが、南京汽車客運站はなかでも重要なターミナルの一つで、玄武湖の北岸南京火車站の北出口右側にあり、鉄道との連絡もきわめて容易である。

塩城へは一時間に一便の割合で運行しており、チケットを購入して窓口を離れる前に発車時刻を確認していると、チケット売りの女性が塩城のどこへ行くのかとにこやかに声をかけてこられた。中国海塩博物館を参観するつもりですと答えると、となりの女性に塩城にそのような博物館があったかどうか訊ねている。南京汽車客運站のチケット係が知らないとなると、なんだか少し不安になってきたが、そのとなりの女性がこれまたにこやかに、確かにあるはずだからまずは塩城に行ってみなさいと教示してくださった。この女性もおそらく確かなことはわからないのだろう。中国では近年、“考古熱”とか“博物館熱”とかいわれるように、考古遺跡を訪問したり博物館を参観したりすることが、一般市民の間で一種のブームとなっているらしい。しかし、なにせ地大物博の中国のことであるから、考古遺跡や博物館の数はそれこそ無限である。しかも、そのブームに応じて近年しきりに考古遺跡の整備や博物館の新設が進んでいるということであるから、数はいよいよ増加していつているのである。無限に存在する考古遺跡や博物館の所在を逐一知ろうとするのは、そもそも無理というものであろう。南京汽车站チケット売り場の女性が、同じ江蘇省の塩城に存在する中国海塩博物館の存否を知らなくてもなんら不思議はない。ただこの二人の女性も博物館熱には少しく感染しているらしく、おもしろそうな博物館だから私たちもぜひ行ってみることにすると真顔でおっしゃった。中国の考古熱と博物館熱は、今後ますます昂じることになるのであろうか。

南京から塩城へは高速バスで三時間半の道のりであり、正午すぎには塩城火車站西広場の長距離バスターミナルに到着してしまった。広場に面するホテルで登記をすませ部屋に入ってみたところ、ありがたいことに「塩城旅游地図」が無料で提供されていて、その表面の塩城市城区図はきわめて詳細で、市街を歩き廻るのに役立つことまちがいないが、城区図のほぼ中央やや東よりの世紀大道・解放大道交差点南側に中国海塩博物館という表記がある。表記が赤字であるのは、塩城の代表的な文化施設であるからであろう。時間は十分あるし、幸いなことにホテル西側が市内路線バスのターミナルとなっている。まずは塩城訪問第一の目的を遂行するまでである。

近年中国の地方都市を訪れて驚くことの一つに、新設の博物館館舎が巨大かつ斬新であることがあげられる。今目にしている中国海塩博物館もそうであり、巨大な宇宙ステーションとでも表現したらよいので

あろうか、なんだかこの世のものとは思われない気がしてきて、入るのがためらわれるほどである。もちろんためらっている場合ではなくさっそく入館してみると、どの展示部門もきわめて機能的に設計されており、「引海制塩」・「行塩四方」・「塩政春秋」・「海塩興城」の四通常展示コーナーと「煮海之歌」・「環海塩趣」の二専題展示コーナーが配置されている。通常展示コーナーの資料・写真・地図はきわめて豊富で、解説も明解であり、四コーナーをゆっくり参観すれば中国海塩塩業史の基礎知識が十分に身に着くであろう。しかしおそらく、そのゆっくりには最低五時間が必要なはずであり、塩神廟関連資料の参観を目的にしている者にとっては、ここにそれだけの時間をかけることはできない。そこでこの四コーナーの参観を二時間にかぎり、塩神廟関連資料が展示されているであろうと予想される「煮海之歌」に向かうことにしたが、やはり予定を三十分ほどオーバーしてしまい、「煮海之歌」コーナーに入ったのは、閉館一時間半前のことであった。

まず次の三つのパネル解説が目に入ってくる。

〔塩の生日〕 淮塩地区の塩民は、塩は塩婆婆からの賜りものであると信じていた。この地域では旧暦正月六日が塩の誕生日、つまり塩婆婆の誕生日とされていた。その日の朝早く、塩民たちは全員が塩田や風車のほとりに出かけて、長くつないだ爆竹をならし（これを“焼塩婆神”とも“焼灘頭神”ともいった）、塩婆婆の靈験が下され、その年の産塩量の大きいこと、塩粒の大きいこと、産塩の精白であることを祈った。……（要約）。

〔太陽祭祀〕 塩城一帯沿岸区の製塩方法は、淮水以南では煮塩が中心であり、淮水以北では晒塩が中心であったが、いずれも晴天の天気が必要であり、そこで太陽は塩民の運命をにぎる主宰者とされた。天からの佑助を祈るために、塩民たちは“烘缸会”を組織した。毎年夏・秋に、塩田と製塩所に芸人をよんで講談や演劇を上演して神を敬拝する祭礼を開き、焼香して太陽神を祀った。……（要約）。

〔龍王祭祀〕 旧暦の二月二日は龍が頭をもたげる日であると伝えられていた。晒塩の原料である海水は潮が漲る時にもたらされるものであるが、それは龍王が塩民に賜る恩徳であると考えられ、そこで塩民たちには龍王を敬拝する習俗があった。塩民は龍王廟に参詣して焼香するとともに龍王紙を焼き、龍王廟から遠いところの塩民は海辺や塩運運河に出向いて焼香し、なんども焼香して、龍王の靈験がはじまり、今年も好い事が多く、塩分の高い海水を送って下さり、風雨が順調で晴天が多く、今年も精白な塩がたくさん生産されるよう、なんども祈ったのである。（要約）。

太陽神はさまざまな機能をもつ万能神であるが、塩業従事者にとってはとくに晴天をもたらす機能が期待されたことはいままでのない。おそらく祠廟が常置されていたわけではなく、祭祀の際にその都度祭壇がしつらえられ、参拝者の敬拝に供されたのであろう。龍王もまたさまざまな機能をもつ万能神であるが、水神としての性格を強くもっていることから、塩業従事者は海水をもたらす機能を期待したわけである。塩民が参詣した龍王廟は、おそらく祭祀の際に臨時に設置されたものではなく、常置されていたものであろう。たとえば、ここ中国海塩博物館にも展示されている清代東台場—東台場は塩城市南方、現在の東台市に存在した淮塩地区有数の塩場である—の官署図には、塩課司のすぐそばに龍王廟がみえている。淮塩地区の主要な塩場には、龍王廟が常置されていた例が多いのではなかろうか。各種の『両淮塩法志』などが掲載している淮塩地区塩場図を一つ一つ確認する必要があると思うが、それは今後の課題とすることとしよう。

興味深いのは塩婆婆崇拜である。太陽神や龍王神は本来万能神であり、全国のあちこちでさまざまな人々からさまざまな機能を期待されて崇拜されていたはずであり、そもそも塩民だけの崇拜神ではないのであるが、これに対して塩婆婆は本来塩業従事者のみに崇拜された、いわば純然たる塩神といえることができる。塩女神崇拜は中国各地の産塩地に見られるものであり、海塩地区では天津蘆台場の塩姥崇拜などがあるが、それが淮塩地区にも存在したことを、今回中国海塩博物館の展示パネルによってはじめて知りえたのである。こうなると、山東沿岸区・浙西沿岸区・福建沿岸区などの海塩区にも存在した可能性が生じるはずであるが、どうなのであろうか。

ところで、この淮塩地区の塩婆婆神は、祠廟が設置されていたのであろうか。天津地区では、今は残存

していないけれども、蘆台鎮の塩姥廟・漢沽鎮の塩母三官廟・葛沽鎮の竈離廟という三つの祠廟に、いずれも塩女神が祀られていたことが確認されている。また葛沽鎮の竈離廟は塩公・塩母の夫婦神が祀られており、よく知られている甘肅省礼県塩官鎮の塩神婆婆廟は、そこで祀られているのは塩神婆婆のみであるけれども、彼女は甘肅省漳県塩川鎮の塩神爺爺と夫婦であるという伝説をもっている。淮塩地区の塩婆婆神は独女神なのだろうか、夫婦神なのだろうか。いろいろな問題が浮かんできたものの、展示パネルをどれだけ見つめていても解答は得られない。

一息ついて背後をみると、そこに鎮座しているのが夙沙（中）・膠鬲（右）・管仲（左）の三塩神像に他ならない。解説パネルの説明には、この三塩神を供奉する塩神廟には揚州の塩宗廟と泰州の塩宗廟があるというのみで、はたして塩城地区に存在したかどうかについては何もふれていない。何もふれていないということは、塩城地区に置かれた形跡を発見できていないからではなかろうか。したがって、当地塩城地区に三塩神を供奉する塩神廟が存在したかどうかは不明であるけれども、揚州や泰州の塩神廟に見られるように、海塩地区では三塩神を合わせて供奉することがあったことを提示するために、おそらく揚州塩宗廟の三神像を模倣して一泰州の塩宗廟は現存しないのであるから模倣しようがない一、塩城中国海塩博物館のこのコーナーに三神像を安置したのであろう。そういえば、安置されている三神像は揚州塩宗廟の三神像によく似ている気がする。

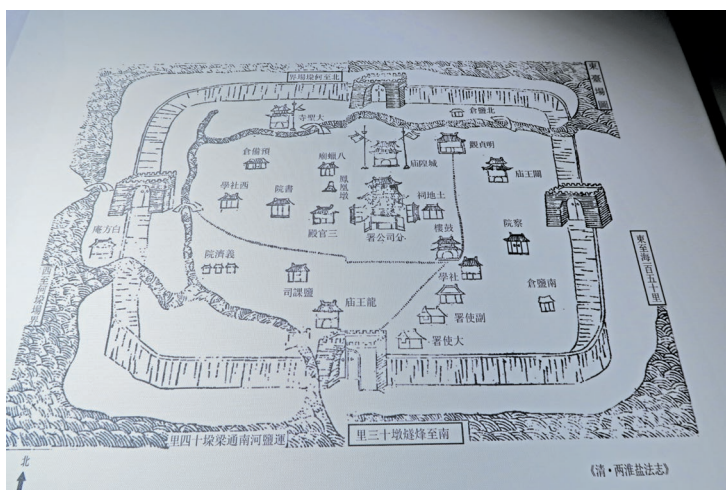
この想定でまちがいないと思うが、ただ、きわめて気になる展示物が一つある。それは“塩神殿”と題された清代の扁額である。木製・縦書きの重厚な扁額で、板面は磨滅が進んでいるものの、塩神殿の三字ははっきり残っている。この扁額の掲げられた塩神殿と称する塩神廟はどこに存在したのであろうか。その祠神は誰であったのであろうか。まずいわずもがなの前提として、この扁額は揚州塩宗廟と泰州塩宗廟の扁額では絶対ありえない。揚州や泰州の塩神廟扁額がある時点で取り外され、それが何らかの経路によって現在は塩城の中国海塩博物館に展示されているというのはいりえないことではないが、そうであるならば、展示の説明パネルにそのことが明示されていてしかるべきはずであるのに、“清代”という説明以外他には何の説明もないし、それにそもそも揚州と泰州の塩神廟はその名称として“塩宗廟”以外の名称は伝えられておらず、“塩神殿”は揚州塩宗廟・泰州塩宗廟の別称であるという推測にはさすがに無理があるからである。つまり、塩神殿というこの扁額をもった塩神廟は、揚州塩宗廟・泰州塩宗廟とは別個の塩神廟であり、その場所については、塩城の中国海塩博物館に収蔵されていることを勘案して、少なくとも淮塩地区のどこかであろうという推測を提示するのがせいぜいのところであると思われる。

一方祠神については、おもしろいことにこの塩神殿扁額は夙沙・膠鬲・管仲三神像の向かって右手に懸けられており、あたかも塩神殿にこの三神像が祀られていたことを示唆するような展示設定となっている。しかし、これは、塩神殿の祠神が夙沙・膠鬲・管仲の三神であったという確たる認識に基づくものでは決してないはずである。海塩地区の代表的な塩神である三神の塑像をおそらく揚州塩宗廟のそれを模倣して安置し、塩神殿の祀神が三神であるかどうかは不明であるという事情はとりあえず無視することにして、そこに揚州塩宗廟の扁額ではないが幸いにも当館に所蔵されている塩神殿の扁額を掲げ、淮塩地区における塩神像設置の一事例と塩神廟名称の一事例を例示しようとしたにすぎないであろう。博物館の研究員は、もちろん塩神廟の祀神が三神であるかどうかは不明であるという事情を十分認識したうえで、このような展示設定をあえて実行しているにちがいない。かりにもしこの塩神殿の祀神が実は夙沙・膠鬲・管仲の三神であったことが事実であるならば、それは揚州塩宗廟と泰州塩宗廟に匹敵する、同じ三神祭祀の塩神廟が揚州塩宗廟・泰州宗廟以外の地に存在し、そして同じ三神像を供奉しながらその名称は塩宗廟ではなく塩神殿であった、という重要な歴史的知見が新たに明らかになったことを意味することになり、そうであればその重要な歴史的知見に中国海塩博物館の説明パネルが言及しないことはとうていありえない。何らの言及もないということ自体に、塩神廟の祀神が三神であるかどうかは不明であるという事情が、端的に示されていると思う。

このようにこの塩神殿は扁額のみが残っているにすぎず、その位置もその祀神もどうやら不明なのであるが、もちろんこれは個人の憶測であって、確かな事情はこの展示設定を担当した博物館の研究員にお聞



塩城・中国海塩博物館



塩城・東台場官署図



塩城・塩神殿扁額



塩城・管仲夙沙膠鬲三神像（博物館）

きしてみるのが、まずは至便な方法であろう。思い切って事務室を訪ねてみようかとも考えたものの、閉館時間もせまっております、それに何の事前連絡もなしに飛び込むのはあまりにも失礼だと判断して、断念することにした。可能であれば三年後に塩城を再訪する予定であり、その折に正規の事前連絡をとったうえで、しかるべき方にお聞きすることにしようと思う。

実のところ今回の塩城訪問に際して実施した紙上調査は、わずかに『光緒重修兩淮塩法志』をパラパラとめくっただけのものであった。これでは準備としてあまりにもおそまつであるといわねばならず、その貧弱な知識でもって博物館の研究員に質問するのはさすがに気がひけたというのも、質問を断念した大きな理由の一つである。ただ、以上の個人的な憶測に関連していえば、その貧弱な知識のなかにも二つだけではあるが、やはりどうしても指摘しておきたいことがある。一つは『光緒重修兩淮塩法志』には“塩神殿”という名称の祠廟は見えていないということである。もっともこれは見落としかも知れず、今一度精査してみなければならない。一つは『光緒重修兩淮塩法志』はその「廨署図説」（卷十三・十四）において各塩政官署区の施設配置を記しているが、そのなかのいくつかの官署区に“神祠”という祠廟が見えていることである。“財神祠”や“福神祠”とかいう祠廟が見えていることからして、この“神祠”ももちろん何らかの神祇を祀る祠廟であったはずであるが、なぜかその神祇名が省略されている。これはどういうことだろうか。一か所であれば単なる脱字であるとも考えられるが、十か所あまりがすべてそうであり、その可能性はない。おそらく『光緒重修兩淮塩法志』が依拠した資料では神祇名が省略されており、編纂者たちはそれをそのまま記入したのであろうが、それは、少なくとも淮塩地区においては、その神祇が何であるかを誰もが知っており、略称を記入しても『兩淮塩法志』の採録記事としてほとんど支障はないという判断に基づいてのことであろう。福神祠や財神祠など通例は神祇名が明記されているなかで、この“神祠”だけが省略されており、そしてこの“神祠”という略称は塩場に隣接した塩政官署区に見えているとなると、その神祇は塩業にもっとも関連の深い神祇、すなわち塩神ではなかろうかという推測がどうしても生じてくる。“神祠”は塩神崇拜の祠廟、つまり“塩神祠”の略称であると思うのであるが、どうだろうか。各署の『兩淮塩法志』には官署区の地図が掲載されている場合が多く、その地図には関王（帝）廟・龍王廟などさまざまな祠廟が表示されている場合も多い。その地図中に表示されている祠廟と、「廨署図説」の説明文の祠廟名を逐一照合すれば、この略称“神祠”の神祇が何であるかを確定することができるかも知れない。結果として見込み違いになる可能性も低くはないと思うが、この作業を避けてしまうわけにはいかないであろう。

ここまで想いをめぐらしてきてふと気づくと、観客は誰もいない。すでに閉館時間ギリギリなのである。あわてて売店に直行して中国海塩博物館編著『中国海塩文明・海塩華章』一部を買い求め、館外に出たのは午後五時半であった。

夕刻五時半とはいえ、日没までにはまだ時間がありそうである。博物館の西南側にまわって“串場河”の東岸を北へ散歩してみることにした。串場河とは淮塩地区の塩場を、文字通り“串刺し”のように南北に貫く人口の運河であり、北の阜寧県阜城鎮から南の海安県海安鎮まで全長は百七十数キロメートルにも及んでいる。唐代に開鑿がはじまり、宋・元・明・清・民国時期を通して、江蘇省沿岸地区の物流幹線水路として重要な機能になってきた。近年になって、東側に串場河と平行に走る“通榆運河”が完成したのにもない、その水運機能の重要度はようやく低下してきたが、観光に資するために再整備された兩岸のありさまからは、往時の盛んな航運の様子を思いうかべることができる。博物館からみて西北の、串場南路に平行する兩岸が“水街”とよばれる海塩歴史文化景区であり、水運施設や塩業施設などが復原された古街となっている。水街に入ってすぐのところに観光船の発着場が設置されているが、その広場に“塩宗祠”という大きな案内板が立てられているのが目に入った。その説明はこうなっている。

海塩文化は塩城精神の精髓であり、塩城発展の歴史的証拠であり、塩宗祠はその格好の証拠の一つである。それは三座の大殿の組み合わせから成っており、真ん中の主殿（塩宗祠）は産塩の祖夙沙・塩業の祖胶鬲・塩政の祖管仲を供奉しており、東殿（塩聖殿）に供奉されているのは塩盤大聖、西殿（塩婆殿）に供奉されているのは塩婆婆である。水街の塩宗祠は一度に五人の塩宗を敬拝することができる

るのであり、これは全国唯一である。(意識)。

すでに述べてきたように、塩城地区にどのような塩神廟が存在したかは残念ながら不明であり、塩婆婆のごときも果たして常置の祠廟をもっていたかどうか不明である。したがってこの三殿は、かつて存在したなんらかの塩神廟をモデルに建設したものではもちろんなく、観光資源の一つとして、観光客の集中する観光船広場に新設したものに他ならない。その新しさからいって、おそらく建設十年とたっていないであろう。この三殿の前に立つと、三殿の前身が塩城地区のどこかに存在したかのような錯覚におちいるかも知れないが、それはまさしく錯覚であって事実であるかどうかは不明であることに注意しなければならない。塩宗祠・塩聖殿・塩婆殿という名称も、もちろんかつて存在したものを踏襲したのではなく、三殿新設の際に仮に命名したものであろう。

ともかくまず主殿に入ってみると、やはり揚州塩宗廟の三神像を模倣したと思われる銅製の三神像が安置されている。次に中国海塩博物館には説明のなかった塩盤大聖の祀られている東殿に入ると、銅製の男神像が安置され、次のような説明板が掲げられている。

塩聖殿（つまり東殿の正称）に供奉されているのは、淮塩地区で一般的に供奉されていた塩神、塩盤大聖であり、これはまた塩城地区の人々が供奉していた塩神でもある。塩城地区は古くから海辺に位置しており、人々は魚・塩の利益を享受していた。漢代に県が建てられてから民国時期に至るまで、海辺の県域には往々にして多くの“竈民”が住んでいた。彼らは煮塩を生業としていた。煮塩には塩竈を使用し、竈のうえに一つの特別製作の鉄鍋を置いたが、当地の人々はこの鉄鍋のことを錨とよんだ（直径120センチメートル、深さ30～40センチメートルの一種の平底の鉄鍋である）。県域の煮塩法の発明者は皇帝から神に封ぜられたと伝えられており、人々は彼のことを“塩盤大聖”とよんだという。塩城地区の人々はその生産労働のなかで、千年百年の鍛錬をへて、淮塩を生産する過程でしだいに次のような一つの習俗を形成するようになった。毎旧暦正月三十日の夜、煮塩に従事する塩民たちはみな必ず煮塩の鍋と竈の傍らに到り、酒肉と刀を捧げ、神銭を焼き蠟燭を灯し、塩盤大聖の画像に対して頭を地につけ膝まづいて拝んだのである。(意識)。

塩盤大聖の“塩盤”とは錨ともよばれる鉄鍋のことに違いないが、竈民が叩頭膜拝したという塩盤大聖の画像は、おそらくどの煮塩場にも掲げられていたのであろう。煮塩を仕事とする竈民に広く普及していたとなると、あるいは神像を祀る祠廟が存在したかも知れないが、これも不明である。

塩聖殿向かいの西殿は“塩婆殿”と名づけられていて、なかには優しい顔立ちの銅製塩婆婆像が安置されている。説明板の内容は博物館の説明パネルのそれとほぼ同じであるが、一つだけ博物館のパネルにはなかった記載がある。それは、塩婆婆は塩聖つまり塩盤大聖の妻であると伝えられていたという記載である。ここで博物館の「煮海之歌」コーナーで生じた塩婆婆は独女神であったのか夫婦神であったのかという疑問が、一挙に解答を得たことになる。塩婆婆は独女神ではなく夫婦神であったのである。塩婆婆像と塩盤大聖像は真正面に対面しており、両者の夫婦愛の深さがしのばれる設定となっている。ここを訪れる夫婦づれの観光客は、この設定をみて互いの愛情を再確認するにちがいない。

塩婆婆も塩盤大聖も、博物館の説明パネルや東殿の説明板による限り、海辺の塩場現地で働く塩業労働者たちに崇拝された塩神であった。もちろん官僚や塩商たちがこの崇拝をまったく無視していたとは考えられないが、その塩神崇拝の主体はあくまで現場の塩業労働者たちであったと考えねばならない。両者が夫婦神であるというのも、夫婦共同で労働しつつ日々を生きる塩業労働者の心情にかなうものであろう。

数年前揚州と泰州を訪問して両地の塩宗廟を探訪した際、この二つの塩宗廟は官僚と塩商によって設立されたもので、塩業労働者や一般市民がほとんどかかわることのない、いわば上層階級の高級サロンのような性格をもっていたこと、これに対して、泰州北城外に設置されていた管王廟は塩運労働者を中心とする塩業労働者によって設置されたもので、いわば塩業労働者と庶民の集会場のような性格をもっていたことを明らかにして、同じ塩神廟といってもその政治的・社会的性格にはそういった相違があったことを確認することができている。淮塩地区の塩婆婆と塩盤大聖は、祠廟が設置されていたかどうかは不明であるものの、その崇拝のありかたは、いうまでもなく後者に相当している。



塩城・串場河行路（博物館パネル）



塩城・塩宗祠説明板



鹽城·主殿管仲夙沙膠鬲三神像



塩城・東殿塩盤大聖像



鹽城·西殿鹽婆婆像

淮塩地区の塩業労働者に塩婆婆・塩盤大聖の夫婦塩神崇拝が存在したことを知ることになったのは、まったく予想もしないことであった。国外にあって『両淮塩法志』などの公的な文献資料を読んでいるだけでは、このような情報はほぼ永遠に得られないであろう。現地訪問の有用性を実感したことである。

夙沙・膠鬲・管仲の三神像、塩盤大聖と塩婆婆の夫婦神像に深く一礼して外へ出てみると日はすっかり暮れている。水街の小さなレストランで夕食を済ませ、ホテルにもどったのは九時過ぎであった。

翌日は、安豊古鎮の散策に一日をあてることにした。安豊鎮とは、淮塩地区の主要な塩場の一つであった安豊場に隣接して塩業利益によって繁栄した鎮市であり、現在は串場河の両岸に古い町並みが復原されて、安豊古鎮と称されて観光客を集めている。また、安豊鎮は陽明学左派の思想家として有名な、かの王艮の故郷である。王艮は周知のように塩業労働者の出身であり、その出身が彼のラディカルな思想に影響を与えたであろうことは、しばしば言われるところである。

塩城から路線バスで東台に南下し、東台から安豊鎮へはタクシーを利用したのであるが、意外に時間がかかり、安豊古鎮の案内板が立つ古鎮入口に到着したのは正午過ぎであった。そこから串場河沿いに古鎮を散策していくと、復原された安豊塩課司の官衙など塩業施設のいくつかが並んでいるが、それらを見学する楽しさもさりながら、串場河にわたってくる晩秋のそよ風がこの上ないほどに心地よく、つい足をのばして十キロメートル余りを歩いてしまった。気がつけば四時半である。王艮の墓や王氏の宗祠なども参観する予定であったが、帰路にかかる時間を考慮すれば断念せざるをえない。古鎮入口の道路わきに立って路線バスやタクシーをまつことにしたが、ところがどうしたことかいっこうにこない。そうこうするうちに古鎮事務所から警備員が出てこられ、三輪バイク車を探して値段まで交渉してくださったのは、心底ありがたかった。東台火車站に到着したのは六時、各駅停車にゆられて塩城火車站に着いたのは八時半であった。もう少し要領よく移動すれば、三時間ほど滞在時間をのばすことができたのであろうが、安豊古鎮串場河の川べりにたたずんで往時の繁栄や王心齋先生の思想に思いをはせることができたのであるから、それで十分というものである。そう言い聞かせてベッドに入ったが、ここ十日間の疲労が急激に押し寄せ、瞬時に眠りに落ちてしまったことであった。

＊

四川省自貢市は井塩地区を代表する産塩地であり、西の塩都ということができる。一方江蘇省塩城市は海塩地区を代表する産塩地であり、東の塩都ということができる。今回の両都の訪問は駆け足であったけれども、塩神廟の存否を探るという第一の目的においていささかの成果をあげることができた。お世話になった方々に、あつく御礼申し上げたいと思う。

帰国後ほどなくして、自貢市塩業歴史博物館の楊蕾さんから電子メールでもって情報の提供があった。「自貢臨時地方議事会」は、1911年12月30日に自流井井神祠を会場に設立されたとされるが、ある観光案内ではその会場が湖広会館（禹王宮）となっているのはどういうことであろうか、という疑問に対する返答である。

まず自貢市地方志編纂委員会編『自貢市史』（方志出版社・1997年）89頁、彭澤益・王仁遠主編『中国塩業史国際学術討論会論文集』（四川人民出版社・1991年）394～395頁、鍾長永等著『千年塩都』（四川人民出版社・2002年）46頁、王仁遠・陳然・曾凡英編著『自貢城市史』（社会科学文献出版社・1995年）41頁の記事をあげて、「自貢臨時地方議事会」は湖広会館ではなく自流井井神祠で設立されたことを確認されたうえで、井神祠と湖広会館はまったく別個の施設であると断定されている。楊蕾さんは湖広会館で設立されたというのは単なる誤伝であるとみているのであろう。老体自身も同意見である。

返信の最後に、自貢の灯会はもとより“天下第一灯”の美誉をほしいままにしている、灯会は五一節の休日まで連続して開かれる可能性があるから、ぜひ参観にいらっしゃいとのこと案内があった。その時のために身体能力の向上、いやそれは無理であろうから、せめて現能力の維持に努めたいと思う。



安豐・古鎮安豐塩課司



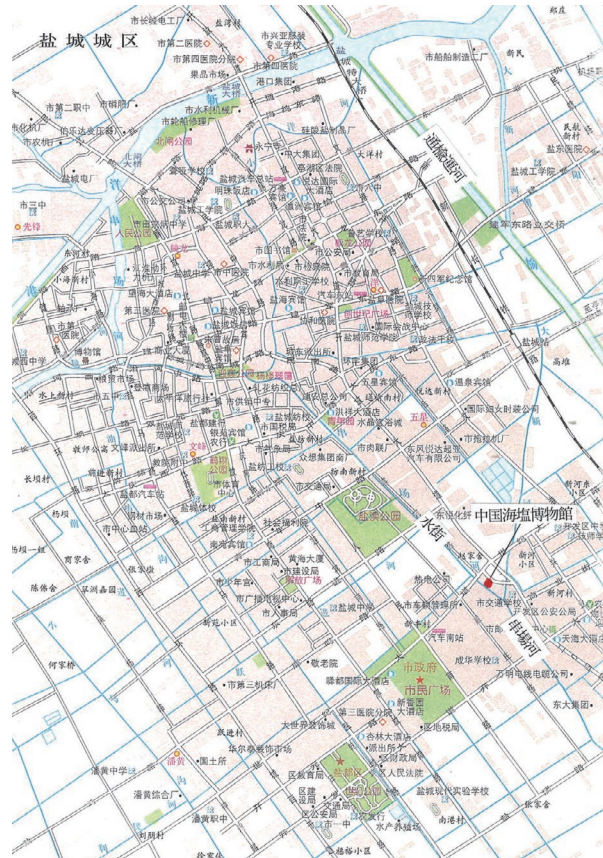
安豐・古鎮串場河



安豐・古鎮老街



塩城・串場河悠悠



塩城市区

写真・図版出典

下記3図以外は、すべて現地において筆者が撮影した写真である（一部加工）。

- ・釜溪河王爺廟段塩運船 程龍剛・鄧軍『自貢古塩道』（23頁）「釜溪河上塩船競発」（来源；『四川塩政史図冊』）から複写して転載。
- ・自貢市区 中国地図出版社『中国分省系列地図冊・四川』（2020年修訂）37「自貢市城区」か複写して転載。
- ・塩城市区 中国地図出版社『中国分省系列地図冊・江蘇』（2016年版）108「塩城市区図」から複写して転載。

※本稿は日本学術振興会科学研究費・基盤研究（C）「中国塩神廟の調査と研究」（2019年度～2023年度）による研究成果の一部である。